



私の横浜

あとがき

雪深い越後の国から関東へ出るのは、越後湯沢から沼田に抜ける三国街道によらなければならぬ。この街道がいよいよ関東へ出ようというときに越えなければならぬのが三国峠である。

現在ではきれいに舗装された国道一七号線が何の苦もなく峠の下をトンネルで抜けてゆくが、その昔、この谷川岳の山塊と苗場山のあいだを抜ける峠道は、手甲脚絆で荷物をかついだ旅人たちにとって、箱根以上に難所であったに違いない。しかし、雪に閉ざされた世界、裏日本の暗い世界から、明るい関東へと開けてゆくこの峠は、どんなに険しくても、そこを通る旅人たちの胸を前途の希望と期待にふくらませたことだろう。

数年前に、私は母とこの峠の下でバスを降り、もうふだんは通らなくなっている峠道を登ってみた。少し登ると昔のままの三国峠があった。山あいのはるか下を国道の走っていくのがみえる。もう、ここまで来れば、後は急な下の坂を降りていけば、関東の平野へ出ることができるのである。

実は、私の母の母、つまり祖母は、いまからざっと百年前、裏日本の古い港町新潟からこの



私の横浜

峠道をまだみも知らぬ新しい港町横浜を目指して越えていった一人である。当時の横浜は、文明開化の窓口であり、日本でもっとも先進的な町であった。まだ十代の祖母は、その横浜へ勉学のために、何日も歩いてこの峠を越えていった。祖母にとっては、いま我々が外国へいくよりも何層倍も遠い町へいく思いがしたことだろう。しかし、この峠を越えていくときに、向うにある横浜の町を思っただけで、不安に胸をときめかしたにちがいない。

当時の横浜は、いろいろな人が、さまざまな期待や願望をもって各地から集ってきて、その人たちによって全く新しくつくられた町であった。しかも海外への最大の門戸であり、新知識と新文明の町であった。そして、その後もつぎつぎと横浜へきた新しい人々が、以前からの人々と、いつも入りまじりながら調和と変動を繰返してきたのが、今日の二六〇万都市横浜である。

この祖母は、八十一歳でオルガンをひきながら脳溢血で倒れてなくなったが、横浜で外人のなかに生活したせいも、日本の因襲から抜けだして、ずい分と合理的な生活の知恵を身につけていた。そして、いまから考えると、我が家でも母を通じて、横浜で得た合理主義精神や卒直さが、何か私のなかにも浸透してきたように思われるのである。

私もまた十二年前、偶然も手伝って、横浜の住民になった。住宅公団の空家入居で、埼玉県の草加と、横浜を示されたのである。当時、銀座の事務所の仕事をしていて私にとって、草加の方は時間的にも近く、また部屋も少し広くて、家賃も安かった。しかし、横浜のもつ「何か」が、私に横浜を選ばせたのである。港の近くに住む私にとって、港の船の出入りや町に接す



私の横浜

るにつれて、横浜は、「何か」以上の親しい存在として私のものになりつつある。そしていまや、市役所のなかで、直接に横浜とかかわりあうようになってしまった。

市民生活白書も今回はすでに四回目の発行である。今回は、「私の横浜」と題してみた。私の個人的な思いは、全市民の二六〇万分の一にすぎないが、この歴大な市民の一人ひとり、何かの意味で、横浜に住むことになり、横浜について何らかの感慨をもっているはずである。それらは、甘くもあり、苦くもあり、つらくもあり、愉しくもあるだろう。その一つひとつが、「私の横浜」なのである。もちろん、この小さな白書で、その全部を示すことは不可能であるが、それぞれの市民の目からみた横浜をできるだけあらわしてみたいと考えたのが、今回の白書である。

本書の第一部は、市民の作文公募という形をとった。ここに掲載された方々はもちろん、熱心に応募されながら残念にも掲載できなかった方々、そのほか、この白書に協力をおしまれなかった方々にも厚くお礼を申しあげたい。

なお、今回の白書は、都市科学研究室を中心にして企画調整局のスタッフのほか、関係各局の協力を得て作成されたものである。

一九七四年十二月

企画調整局長

田村 明

私の横浜

昭和五〇年 市民生活白書

昭和49年12月10日発行

昭和50年3月15日2刷発行

編集・発行

横浜市企画調整局都市科学研究室
横浜市中区港町一丁目一番地(〒231)

電話(045)6712011

印刷 明善印刷株式会社

装幀・デザイン 多田 進

写真 天野裕之

700円

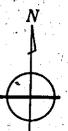


東京都

埼玉県

神奈川県

千葉県



0 5 10km

30km

30km

50km

第一回の市民生活白書がでたのは昭和39年2月。副題を「新しい横浜への展望」とした。38年4月に革新市政が誕生し、市民生活の側から都市横浜の現状と、それに対応する市政がどういう状態におかれているのか、その一つの決算書をつくろうとした。

第二回は41年11月。副題が「新しい横浜の記録」。人口が200万人に近づく状況下で、郊外の無秩序開発の告発と市財政危機の分析に力点が置かれた。

第三回は46年1月。主題は「横浜と私」で、副題が「市民生活白書」。主題と副題を入れ替えたのは、内容を、市民が日常使う会話や考え方で表現することに努め、白書のもつ役所的イメージを薄めたため。都市と個人のかかわりあいを中心に重点をおき、平均的家族と先生の対話形式で市政の問題点をさぐった。

第四回の市民生活白書が本書で、主題は「私の横浜」。

横浜市